

日本における6人制バレーボール導入過程について

—1950年代を中心に—

森田 信博

About six system volleyball introduction process in Japan

—Mainly on the 1950s—

Nobuhiro MORITA

Abstract

This study is intended that I consider the process when Japan Volleyball Association (JVA) introduces the six system by the international-style rule. The International Volleyball Federation (FIVB) was formed in Paris around Europe in 1947 by 14 countries. And part of American rule revised it as FIVB rule and was adopted. A rule of international six system volleyball was revised based on the suggestion of each country in the second general meeting (1949). In Japan, participation was approved in the third general meeting (1951), however there will be FIVB rule, American rule, Far East rule and Japanese rule in the world. Nine Japanese style system rule that revised Far East rule became the original volleyball. JVA did not make clear the relations of nine system that spread in Japan and international six system. And, in JVA the domestic six system worked on the spread, too. Dissatisfaction from the district which enforced only nine system to JVA and the uneasiness to six system were shown. JVA emphasized nine system and suggested 6・9 system combination plan. However, by holding of the Asian Games and the world championship participation will shift to six system more. Furthermore, the official event of the Olympics and by becoming Tokyo shifted to six system holding totally. Still JVA continued maintaining a policy of the 6・9 system combination.

はじめに

極東競技選手権大会は、満州国の加盟問題が大きな争点になり、1934（昭和9）年の第10回大会を最後に中止になった。日本のバレーボール競技は唯一の国際的な競技会を失ったが、国内を中心に競技会がこれまでと変わりなく開催されていった¹⁾。従来の極東式のルールに規定されていた9人制は、国内での実施にあわせて毎年ルール改正が行われ、日本独自のバレーボールルールを生み出し普及はさらに広がった。中等学校をはじめ、小学校にあわせた規定を設け、1941（昭和16）年の改正ルールでは、一般男子のネットの高さを5cm下げ、コートの大さをサイドラインを1m、エンドラインを0.5m縮小している²⁾。しかし太平洋戦争の激化とともに1943（昭和18）年春には、バレーボール競技のすべての公式戦が取り止めになった。

一方、YMCAを主体に東欧諸国を中心にヨーロッパに普及していった6人制バレーボールは、第一次世界大戦以後には、国際統轄団体結成の動きが高まっていった。ポーランドの提唱で議論は進められたが、競技ルールの

統一は各国の利害もあり、さらに第二次世界大戦によって結成の機運も遠のいてしまった。しかし戦後、1946（昭和21）年8月には、再び結成のための組織委員会が開催され、翌1947年4月にパリで国際バレーボール連盟（以後、FIVBと略³⁾）設立の会議が14ヶ国で開催された。日本とドイツは、この会議には戦争責任を問われ招集されず、1951（昭和26）年の第3回FIVB総会で加盟承認されることになる。

しかし加盟によってFIVBの国際ルールの6人制バレーボールを採用決定するが、これまでの日本式の9人制をどのように扱うかは日本バレーボール協会（Japan Volleyball Association 以後、JVAと略）としては大きな問題であった。結果的には、1964（昭和39）年の東京オリンピックでの正式競技化によって、バレーボールは6人制競技であることが一般化した。日本式9人制を基盤としながらも、6人制の導入を進めたJVAは1950年代にどのような対応を行っていたのかを明らかにしたい。

1. 戦前のFIVB結成の動きとJVAの対応

「排球に関する専門委員が国際ハンドボール連盟内にできたのは1934年のストックホルムでの同連盟の会議の時からである。」⁴⁾そして、1936(昭和11)年、ベルリンオリンピック大会の際に、FIVB設立のための会議が、ポーランドの提案で開催された⁵⁾。結成までには至らなかったが、そのベルリン会議に出席した大日本排球協会常任理事、三宅勝重は次のように参加理由を報告している。

ベルリン大会時に、廣田理事が渡欧していることが重なったことから「(大日本排球)協会代表という名目で出来ることなら、ベルリン会議に出席して貰い、大いに我東洋ルールを吹聴して貰って、うまく行けばこのルールに昇格させることに成功さして貰いたいものである」とし、委員会も「東洋に於いては既に立派な東洋ルールを確立し、之によってアジアの大国が定期的に選手権大会を開催している状況を承知し、ベルリン会議での「東洋のバレーボール」採用に自信をもっていた。と同時に「然し乍ら先方で驚いた以上に実は当方でも意外に欧州方面の普及状態の廣範なるに却って喫驚したものである」⁶⁾を知り、「同委員会ではあくまでアメリカ^(ママ)ルールを基礎とした規則に統一したく(中略)伝統的なアメリカルールに執着があるらしい」と会議の雰囲気述べている。さらに議論の焦点を6人制と9人制の違いであり、得点の違いとしているが、「要するに欧州に於いてまだまだ遊戯乃体育運動の域を脱しきれないことに起因してこんな主張が行われているのではなかるうと思う」、「サイドアウト制を廃止して現在のポイント制に改めたのも、スポーツとしての競技進行にスピードを加えんと企てたからで、現行東洋ルールこそはおそらく排球競技の最高水準ルールであろう」と自信を示している。打開策として「欧州ルール、アメリカルール、東洋ルール」をそれぞれ認め、三者のリーグカフェデレーションを結成してから国際統一ルールを制定することが考えられ、日本協会としてはあくまでも「東洋ルールを以て国際ルールたらしむべく更に主張を繰返すべきが妥当」と当面の方針を報告している⁷⁾。9人制と6人制に対する戦前の大日本排球協会の理解と立場を明確に表しての意見であり、戦後も一貫して続く基本の方針となる。

2. FIVB結成と統一ルール

1939(昭和14)年には、ナチスドイツのポーランド侵攻により、第二次世界大戦が勃発して国際バレーボール連盟結成は見送られてたが、戦後1946(昭和26)年、再びポーランドの提唱で、フランス、チェコスロバキアの賛同を得て、組織委員会が結成され、翌1947年4月、FIVB設立のパリ会議が14ヶ国の参加で開催された⁸⁾。

そして初の国際ルールの制定は、ルール委員会によって次のような提案がされた。

「1947年制定のアメリカバレー協会公認ルールをもとに、以下の三点を変更する(1)メートル制を採用、(2)ボールは腰(waist)より上の身体でプレーしてよい、(3)ブロッカーは他のプレーヤーが触れるまではボールに触れられない。ただし他のプレーヤーはブロッカーから1m以上離れていなくてはいけない。それ以外のルール改正提案は、1949(昭和24)年の第2回プラハFIVB総会までに検討すること」⁹⁾となった。

1949(昭和24)年第2回FIVB総会では、第1回男子世界選手権大会の期間中にプラハで開催され新たに、アルバニア、アルゼンチン、イスラエル、ノルウエー、ソ連、トルコ、ブルガリア、レバノンが加盟し計22ヶ国になるとともにIOC(国際オリンピック委員会)の公認団体に承認されたことが紹介された。そして加盟各国の改正提案を取り入れたFIVBルールが公表された。1951(昭和26)年9月第3回FIVB総会が、第3回男女ヨーロッパ選手権大会期間中にパリで開催された。この総会の新加盟9ヶ国に日本と東ドイツが含まれ、それぞれ個別案件として承認投票が行われ、さらに「平和宣言」が採択されるなかで加盟が承認された。

3. FIVBに対するJVAの対応

1950(昭和25)年3月のJVA全国評議員会で、「国際バレーボール連盟加入の件」が議題とされた。「加盟後国内に於ける日本式ルールの使用に対して束縛を加えられるか否かが不明であり、又国際式ルールと日本式ルールの併用が可能であった場合にもこれをいかにして効果的に二本立てに運用し得るかに疑問があり、これ等の点について尚慎重な調査及研究が必要であるので一応保留することとする」¹⁰⁾と極めて慎重な態度で対応している。というよりも従来行ってきた9人制バレーボールを唯一のものと考え、その継続以外に受け入れるだけの情報もなく、「日本式バレーの海外への宣伝及極東オリンピック大会の後身たるアジアオリンピック大会への極東式ルールによるバレーボールの参加実現については別個に努力する」と極東での復活には積極的な方針を示し、JVA内での方針が了承している。「焦点」では、加盟へのさまざまな意見があることを紹介した上で、「リクリエーション的と競技的。日本でのバレーは<競技>として育った。先ず世界にそのおもしろさを認めさせることが急務だと、宣伝手段の加入是非論一しきりデータ不足で、どっちつかずの保留となる」と会議での賛否の議論をふまえながら、日本式バレーボールの普及には、積極的な広報こそ重要であると加盟に賛同の意向をしている¹¹⁾。

翌1951(昭和26)3月の定時評議委員会では、「国際バレーボール連盟管理委員会が日本バレーボール協会を日本に於けるバレーボールの統轄団体であることを認め、日本の国際連盟への加盟を承認した情勢、及び加盟後も当分は国際ルールによる競技会は日本国内に於いては持たぬ方針、又ルールについては更に彼我の相違点等を研究、日本ルールを世界のルールに持ち上げる一ステップとする考え方等の上に立」つ事の提案があり、承認された¹²⁾。加盟承認は必ずしもスムーズとはいえなかったしFIVBルールもすでに2度改定され、日本の提案が採用される余地は多くはなかったことを考えると、情報不足であり、加盟時期もやや遅かったといえる。また、「編集後記」では、まだ加盟前ではあるが「ご存知のように、海外の世界標準ルールはプレーヤー六人から成るローテーション・システムであり、(略)ネットも高いし、更に現在バレー界のトピックとして盛んに論議されているホールディングは硬く禁ぜられており、これを防ぐための所謂『タッチ』は法度になっている。その外攻撃は前衛のみ可能でしかもその範囲に制限あり、コートの外で打つことは許されていない。この中、ネットの高さは一寸問題で」などと不安要素をあげながら「国連加盟後は、日本ルールの長所、並びにローテーションの長所を併用した改正標準ルールを提唱をする、という

日本協会会長の言明は、この意味で我々の将来を明朗にするに足るものだ¹³⁾と楽観的に受け止めている。そのため戦前の1941(昭和16)年以来の大幅な1950(昭和25)年改正ルールは、この問題を前提としながらも「国際競技規則との関連を、一応考慮せずに改編」していることをあえて述べている。

4. 世界のバレーボールの異なるルール

FIVBの第3回総会によって統轄する地域も、ヨーロッパ、北アメリカ、中央アメリカ、南アメリカ、アジアと世界的な規模となってきた。それと同時にバレーボールルールが大きく、四つ存在するようになった。FIVBルール(国際ルール)、アメリカンルール、極東式ルールそして日本式ルールである。

1950年頃のルールからみたバレーボールは、H.C.ルールが国際式、アメリカ式そして極東式と比較しているが、そこに日本式ルールを加えると表1ようになる。

H.C.ルールは1950年代に世界の約30ヶ国以上のバレーボールの普及過程を調査しながら、東欧を中心としたヨーロッパとアメリカそして極東(Far Easter)のバレーボールのプレースタイル(methode of play)を世界の主流として特徴をあげている¹⁵⁾。

表1. バレーボールルールの比較(一般男女)¹⁴⁾

	国際ルール(1949年規定)	アメリカンルール(1950年規定)	極東式ルール(1934年規定)	日本式ルール(1950年規定)
序 則	ネットの高さを除き、男女共通	同 左	ネットの高さ、コートの広さを除き、男女共通	同左およびボールを除き、男女共通
コートの広さ	18m x 9m	同 左	男子; 22m x 11m 女子; 18m x 9m	男子; 21m x 10.5m 女子; 18m x 9m
センターライン アタックライン	あり あり(15cmラインで三等分)	同 左 規定なし	規定なし 規定なし	同 左
ネットの高さ	男子; 2.43m 女子; 2.24m	男子; 2.43m(8フィート) 女子; 2.28m(7フィート6インチ)	男子; 2.30m 女子; 2.0m	男子; 2.25m 女子; 2.0m
ボール 円周・重量 気圧	65-68.5cm・250-300g 0.52-0.58kg/cm ³	66-68.5cm・280-311g (26-27インチ)(9-10オンス) 0.45-0.56kg/cm ³ (7-8lbs)	65-68cm・280-340g 0.52-0.56kg/cm ³ (7.5-8ポンド)	男子; 66-67cm・300-320g 女子; 62-63cm・240-260g 630-670g/cm ³
チームの選手	6名(12名を超えない)	同 左	9名(15名を超えない)	9名(12名を超えない、ただし5セットマッチの時は15名)
天井までの高さ	地面(ground)から7m	地面から20フィート(約6.1m)	地面から5m	同 左
サービスエリア	エンドライン右側3mのエリアを設ける、ただし、2m以上の奥行き	同 左-ただし、ラインはインチで	バックラインの後方であればよい	同 左
マーカー	5cm幅でネットの端でサイドラインとセンターラインに垂直につける	同 左-ただし2インチ幅	採用されていない	同 左
サーバー 本数・順序 サブフォルト 他の選手	1本・ローテーション順 「サイドアウト」のコール 自分のエリアに位置	同 左 同 左 同 左	2本・事前にチームごとに届け出 2回続けてフォルトで「サイドアウト」 どこにいても自由(規定なし)	同 左 同 左 同 左
試合のセット・1 セットの得点	5セットマッチ3セット先取 2点リードしての15点	3セットマッチ2セット先取 同 左	5セットマッチ3セット先取 2点リードしての21点	3セットマッチ2セット先取 同 左

有効打部位	腰から上の身体部位	同 左	膝から上の身体部位	膝から下(膝を含む)はプレーできない
プレー回数 (ネットプレー)	相手方に返すまでに3回以内 (対応なし)	同 左 (同 左)	同左(ネットに打たれた場合は 4回以内)	同左(一競技者は連続して三度 以上プレーすることは許されない)
得 点	サーブ権を有しているチーム (サイドアウト制)	同 左	サイドアウトごとにサーブ権を 得たチームに得点(ラリーポイン ト制)	同 左
チェンジコート	各セット終了時と最終セットで 一方が、8点取った時	各セット終了時と最終セットで 一方が8点取り、得点の少な いチームの要求があった時	セット終了時は行わず、一方の チームが11点取った時	同 左
タイムアウト	各セット、2回	同 左	選手交代、負傷の場合	同左の他、各セットに1回(30秒 間)、セット間にチームから要 求があった場合(2分間)
ドリブル	他の選手が触れる前に連続し て触れられない	同 左	同左、ただし、ネットにボール が触れた場合は、連続してプ レーできる	同 左
ホールディング	ボールをフォローするプレー	規定なし	フォロースルーは許される。	同左、『タッチ』攻撃は許される
ブロッキング	前衛のみ、ボールに触れた場 合はブロッカーから1m以上離 れた選手しか触れられない	前衛のみ、ただしそれ以外は規 定なし	すべての選手が参加できる、そ れ以外は規定なし	同 左
マルチプルコン タクト、オフサイ ド	許される、ただし同時に触れた 場合	許される、ただし同時に厳しい ボールをレシーブした場合	許されない	許される、同時であれば1回の プレーとしどちらも続けてプ レーできる

1) ヨーロッパのバレーボールの特徴

- チェコスロバキアとソ連が大きな影響を与えている。とりわけソ連チームがヨーロッパの代表的なバレーボールである。
- ソ連は、2人のセッターに4人のアタッカーで、前衛から3-1-2フォーメーションで、3人がブロッカーとなる。後衛のサイドにエースを配置する。
- 多くは、オーバーハンドサーブであるが、強いサイドハンドか風車式(wind mill serve)も使用。
- レシーブは常にオーバーハンドを使い、可能な限りオーバーハンドでセットアップする。早いテンポのゲームに有効となる。ワンハンドパスもかなり有効に使用する。
- 短い助走(3から5ヤード)から両足踏切でスパイクを打ち、しばしば3m以上離れた所からも打つ。腕の動作は、頭の後ろから前へあるいは後方へ振り、手首のスナップをきかせる。
- BC(バックセンター)がブロックないしスパイクミスのカバーをする。
- ブロックは、1人、2人、時々3人で行なう。
- 強く低いボールのレシーブは体を滑らせるように飛びつく。

2) アメリカのバレーボールの特徴

- 代表とするチームがなく「標準的なゲーム」もないが、イースタンタイプとウエスタン(通称カルフォルニアと呼ばれる)タイプに分類できる。
- イースタンタイプは、よりオーソドックスで「粘っこい」(sticky)ハンドリングや片足ジャンプ、3

- 3フォーメーションを特徴とする。

- ウエスタンタイプは、南カリフォルニアのチームにより開発され、4-2フォーメーション、両足ジャンプで明確なプレーを求めるヨーロッパ的なバレーボールである。
- サーブは多くはオーバーハンドであるが「フローター」(floater)サーブを用いる。
- 身長もあり、早いゲームを展開し、強力なスパイクも打つ。
- 2回目のボールをトスしているが、非常に高く、短いクイックスパイクは用いていない。
- セッターは中央にスパイカーは左右からブロックに構わず強打している。
- 若いプレーヤーにより片手レシーブがみられるが、飛び込むプレーは練習段階である。

3) 極東のバレーボールの特徴

- この地域の平均身長からネットの高さは低めに設定され、コートを広く設定している。
- 3-3-3フォーメーションで、身長の高いプレーヤーは前衛に、低いプレーヤーは後衛に配置され、広いコート等を等分に配置され、プレーが比較的長続きする。
- スパイクはプレーに応じて、前衛ないし中衛が行なう。前衛は通常ネットの近くで素早く、鋭角的に攻撃するが、強烈に打つよりも正確に狙い撃ちをする。中衛の攻撃もブロックがあると相手守備の裏をかいて、ロブをあげたりフェイントをかける。
- スパイクは前衛のトスによって、通常中衛の3人

- から攻撃するが、守備をみてさらにボールを前衛ないし中衛のオープンサイドに素早い上げ直しトスを行なう。さらにこのトスを途中でカットするようにスパイクする。
5. 各選手は、スパイクやブロックには制限がなく、中衛はトスとアタックの力を持ち、後衛の選手でさえスパイクを許される。
 6. 前衛によるパスおよびトスは短く低く送られ、ブロックを意識してシャープなクイックな攻撃多い。また、前衛から中衛にコートを横切るトスや中衛同士とのパス交換もブロックの意表をつく。前衛によるセッターをはさんだでの2人同時の「タッチ攻撃」は独特であるが、2列6人の選手が攻撃に参加することで可能となるフォーメンションプレーであり、ボールへの手首を利かしたフォロースルーも利用されている。
 7. さらに西欧のスパイクは多く横向きで、空中でのターンが求められるのに対し、極東のスパイクのアプローチの線が常に前衛か斜め前衛である。さらに西欧ではセッターとスパイカーが前衛一線なり、トス、スパイク、ブロックがパターン化して攻撃の選択を制限されている。つまり、誰がトスし、誰がスパイクするか分かってしまい、単調なプレーの連続となる。
 8. 何人でブロックしても反則ではないが、3人2人で行ない、スクリーニングを効果的に利用している。さらに狙い打ちされたボールをすべての選手で守備する必要があり、飛び込んで素早くリカバーしている。片手でのプレーはあまりなく、固めた手のひらを上に強いボールをレシーブしている。
 9. サーブはエンドラインの後方のどこからでも打て、ランニングサーブも可能で、とりわけ第1球目は強く難しいボールを打つことを試みる。高い・低いサーブ、回転・無回転サーブあるいはオーバーハンド・サイドハンドなどすべての種類のサーブを用いるが、とりわけ強い風車式が普通である。2回のサーブが可能であるので、多くは第1球目に力強いサーブで第2球目を確実なサーブを行ない、単調なサーブだけになることはない。
 10. 守備のプレーでは、ネットに触れたボールのリカバーとしてのエキストラなもう1回のボール接触は、プレーのチャンスを増やしゲームをより面白くする。例えばスパイクの代わりにボールをネットに打ち、前衛にトスを上げ直させたり相手コートに返したり、ブロックでのタッチ後も3回のプレーを可能にしている。
 11. スパイクに対しては、通常3人ブロックで効果的

な守備をしている。他の6人で守備を行ない、4回のプレーを最大限利用している。

H.C. ルーは、ヨーロッパとアメリカと極東のバレーボールの違いを概観して、「極東のゲームと西洋のゲームは、規則の違いのために基本的に異なり、比較は非現実」と述べるものの評価をしていないが、中国チーム代表の経験もあり、「東洋人はすべてのレベルプレーヤーに適応できる、レクリエーションゲームや競技的なゲームのルールを30年以上公表してきた」と極東バレーボールをより興味深いものとしているように思われる¹⁶⁾。

5. FIVB 加盟後の JVA の対応

1951年9月に日本加盟は、FIVB パリ総会で個別案件となったが承認された¹⁷⁾、しかしJVAは「国際式ルールによる競技会は当分の間、開催せぬことに決めた。」それは「日本式を骨子とした」国際ルールの調整をFIVBに提案する準備のためであったが¹⁸⁾、この年ニューデリーで開催された第1回アジア競技大会¹⁹⁾では、バレーボールはアジア連盟が未結成のため競技加盟できず不参加に終わっている。このことからJVAは、従来どおり国内だけでの競技会の開催をすると同時に、FIVB主催の競技会に参加する前にまずアジアでの9人制バレーボールの復活を優先していく。日本国内ではFIVB加盟後3年目をむかえた1953(昭和28)年にも、「国際ルールの是非をめぐって6人制推進派、9人制擁護派と、いろいろ論議が繰り返されてきた。長い間築かれた9人制の伝統は根強く、むしろ9人制を国際ルールとすべきとの機運が濃厚で、6人制の国内普及は休止状態におかれていた」²⁰⁾結果、世界選手権大会への参加勧誘もあるなかで、FIVB総会には5年後の1955(昭和30)年までJVAの関係者を派遣しなかった²¹⁾。

1) 国際ルールによる大会

一方、選手の間には国際試合参加への希望が徐々に高まってきた。さらにアメリカ統治下の沖縄協会の仮加盟が承認され那覇高校が全日本高校女子選手権大会に参加することになり、「国際ルールによるオープン大会」を開催することになった²²⁾。全日本選抜優勝大会を国際ルールで、全日本学生東西対抗戦を国際ルール、日本ルール併用で開催を計画したが、国際ルールに対応するというより、「将来、国際バレーボール界に進出した機会に、日本式9人制を海外に認識させるという遠大な意図からであった。」²³⁾

1953(昭和28)年5月、初の外国チームとして全香港を招待し全国8都市で18試合が行なわれた。香港チームのクリアなボールハンドリングを見せられ、とりわけ「すく上げ式のアンダーパス、チェスト・トスやネットプレー、巻き込み式のタッチ」などが、国際的には通用

しない、との指摘がされ²⁴⁾、ホールディングとオーバーネットの判定が甘いとクレームを受けた²⁵⁾。

2) 早大のアメリカ遠征

同じ1953(昭和28)年3月から2ヶ月間、早稲田大学がアメリカ遠征を行なった。「日本だけのバレーボール」から「世界に通じるバレーボール」を習得し、将来日本が国際進出する場合の大きな足がかりとなること、世界の趨勢の一端を知ること²⁶⁾をJVAから期待された。早稲田大学は、6人制のほか9人制での親善試合を行ない、全米学生選手権大会にも出場した²⁷⁾。アメリカバレーボール協会のH.ウィルソン理事は早稲田大学チームを高く賞賛するとともに9人制バレーボールに対して「(国際排球協会が)東洋ルールの頗るすぐれた点を取り入れることの出来なかったことを頗る遺憾とする次第である。(略)そのすぐれた美点を我々に紹介されていたとしたら、そのルールの中に非常に観衆を面白がらせるような点は、国際ルールに結合されていたらと信じる。(略)私は東洋式は非常に価値ありとみなされる点があると考えている」²⁸⁾と極めて好意的な評価している。

9人制ルールへのアメリカからの高い評価を受け早稲田大学の選手が初めて見るアメリカの6人制に対して「アメリカのバレーはテンポが遅く、和気あいあいとしている」という印象をもったのに対し、ヨーロッパの6人制にふれた人たちは「テンポも早く、なかなか面白い。これからは6人制の時代になる」と異なる意見がJVA内での9人制、6人制議論に混乱をさらに招いた。翌1954(昭和29)年2月の全国評議委員会では、従来通り9人制重視の方針で国内での6人制大会は開催しないことが決まった。

3) アジアバレーボール連盟の結成

1954(昭和29)5月、全日本男子選抜チームは香港遠征と帰途沖縄に立ち寄る計画が実現した²⁹⁾。従来の極東ルールによる9人制であったが、コンクリート製の床での試合であり、「サーブの打順が6人制と同様、ローテーション方式」などすべての面で日本のルールと異なっていた³⁰⁾。

同年、マニラで開催された第2回アジア競技大会³¹⁾の際にアジア競技大会連盟は、次回第3回競技大会を東京で開催することを決定した。JVAの西川会長は、その際バレーボールを正式競技種目とすべく参加各国に呼びかけ、アジアバレーボール連盟を結成させた。そして連盟結成記念大会として6、9人制アジア選手権大会を、翌1955(昭和30)年に東京で開催することを決めた。さらにJVAは、4年後のアジア競技大会でのバレーボールを6、9人制併用できれば9人制単独で開催することを提案した。しかしアジア競技大会連盟は、FIVBの正式ルールである国際式6人制の一本化が望ましいとし、

9人制を実施するにはFIVBの承認を求めた³²⁾。翌1955(昭和30)年11月にはアジア競技大会の準備委員会を立ち上げるとともに、フィレンツェでのFIVB第5回総会に9人制実施の承認を求めて馬淵主事兼理事が出席することになる。

1955(昭和30)年2月の全国評議委員会では、アジアバレーボール選手権大会の9人制実施のために、ネットを高く、コートを広くして元の極東ルールが改正提案された。しかし、国内適用については慎重論も多く、従来通りの規定が併用された³³⁾。同年5月に東京体育館の土のコートで開催されたアジア選手権大会には、一般男子極東式9人制に日本、韓国、中国の3ヶ国、国際式6人制には、日本とインドのみの参加となった³⁴⁾。

6. 国際式バレーボール導入の検討

1955(昭和30)年11月の全国理事会では、アジア選手権大会の結果をふまえ国際式バレーボール導入について協議が行われた。インドチームが見せた国際式6人制は「我国バレーボール界の一つの大きな問題を齎し、世界各国の採用するルールに対する我々の態度の決定」を強く迫るものであったと受け止めながらバレーボールは「あくまで国民大衆のゲームであり、我々に最もふさわしい、又方法においても他に勝るとも劣らぬ極東ルールを採用して来ている」とJVAの自負を確認しながら、JVAの態度を慎重しかし明瞭にする必要をあげ、次のような項目を議論している。

1. 現状をいかに認識するか、2. 我々は極東ルールを守るべきであるか、3. 国際ルールの導入 イ、可、否、ロ、導入の目的、ハ、導入の程度一普及及発展を図るべきか、ニ、協会は現状の制度のままでよいか

満場一致で賛成されたのは、「我々は現行極東ルールを以て我国のルールとし、これを各国に主張すること」が再確認され、国際式については、次のような「根本方針」が確認された。

「日本バレーボール協会は極東ルールによる9人制バレーボールの競技としての優秀性を自負し、之を国内に於いて堅持すると共に国際バレーボール界との交流が究極において、このルールの普及発展及国際的進出に資するものなることを認め、国際ルールによる6人制バレーボールの導入消化を進める方針を再確認し、これが具体化の方途を一段と推進する。」³⁵⁾

同会議でアジア競技大会でのバレーボールのための準備委員会結成と極東式実施のため承認をうるためにFIVB総会に代表派遣が決められた。1955(昭和30)年11月に開催された第5回FIVB総会にはじめてJVAの理事が出席して、アジア競技大会での国際式6人制、極東式9人制併用の承認を提案した。FIVBの総会では、

アジア地区のFIVB加盟の推進役を日本に期待して、6人制9人制併用が承認された³⁶⁾。

FIVB総会に出席したことにより、国際式6人制バレーボールの競技実態の理解のために、1956(昭和31)年8月パリでの開催の男子第3回、女子第2回世界選手権大会の視察派遣が行われた。国際ルール、審判をはじめ6人制への先入観等の是正を強く求められたが、中国女子が6位に入ったことは、日本女子チーム上位入賞を期待させた。さらに、第1回国際式バレーボール大会が1957(昭和32)年1月に、大学、企業、米軍羽田空港等14チームで開催された³⁷⁾。

1) 国際式バレーボールの導入の方策

1955(昭和30)年11月に国際式6人制バレーボールの導入方針を正式に決めて以来、2年後の1957(昭和32)2月の全国評議委員会になって具体的な方策を検討している。ただし、極東式9人制の国際的普及という「根本方針の維持堅持」を満場一致で承認した上での議論であった³⁸⁾。まず、翌年5月に開催予定のアジア競技大会での初のバレーボール実施に関してであり、その後の運営形式であった。そして「次回の世界選手権に出場し、各国との交流を深め、日本バレー界の姿を知らしめること」が「国際式に対する根本方針の具体化」となると、男女2チームの派遣を提案した。その後、出席した全国評議委員会から質疑が多数出された。大きな関心事は国際式と極東式の併用による競合問題と多額の派遣関連費用であった。特に具体的方策により、極東式が犠牲や負担になり、二協会への分裂もあるのではという不安であった。協会としては、「国際式も同じバレー」であり、併用をして「根本方針にある通り、極東式をPRするスローガンの下に万事スタートしている。極東式を阻害しないで国際式を以て世界と交流」して、問題があればその時に考えるという方針を回答している³⁹⁾。国際式の推進への疑問に対して「世界の動きを見ると国際式を無関心にて見すごす情勢でないことは明白である。(略)極東式の犠牲において云々については、我々はより一層大きな見地からこれを乗切らねばならぬ」と積極的な推進に賛成する意見もあるが⁴⁰⁾、多くは少ない情報への疑問と不信であった。

2) 国際式6人制のバレーボール大会開催

翌年に迫ったアジア競技東京大会での極東式、国際式併用実施と世界選手権派遣への準備のために国際式の競技会を積極的に開催することになった。国内では、国際式での東西対抗戦(一般男子のみ)、すでに男子のみで開催した国際式大会を男女で行ない、全国ブロック別大会を開催していく。国外では8月モスクワで開催の世界青少年友好大会に男女チームを派遣、同じく8月パリで開催の世界学生大会に男子チームを派遣する。さらにソ

連男女チーム招聘の希望と朝鮮大会への参加の計画を実現しつつ、1960(昭和35)年の世界選手権大会に男女チームの参加をめざすというものである。実現をより確かなものにするために、従来の国際委員会ではなく、規則、審判、指導、競技の四委員会に国際式専門の副委員長を任命して各分野を通して推進することになった。

3) 極東式の普及策

JVAの「本来の使命である9人制バレーの普及強化策」を次のように協議している。従来の大会⁴¹⁾に加え、アジア競技大会の準備強化のため、都市対抗優勝チームの海外派遣として、一般男子は香港、一般女子は台湾、沖縄へ派遣をする。ブロックごとに中学生への普及を図る。さらに中学卒工員の全国大会の開催を計画していく。高校生の海外遠征の必要を問われ、JVAは女子の国際親善のゲームの意義を回答している。実施要項でネットの高さが、一般男子の大会が2.30mに改正されて2年も経過しているのに対し教員大会のみ2.25mであることに疑義が出されが、協議、採決の結果従来通りとなった。

4) モスクワ遠征報告

JVAの理事で後に理事長になる前田豊は、JVA内では、極東9人制の保持推進派といわれていたが⁴²⁾、1957(昭和32)年8月にモスクワで開催された「第3回世界青少年友好スポーツ大会」の男女団長として国際式6人制バレーボールに初参戦した⁴³⁾。まず、国内で理解されている国際式6人制ルールと審判の実際の違いにふれた。(1) ネットの高さは、男子は2.45mであった。(2) セット間のタイムアウト実際にはない。(3) 選手交代はすべてV字型である⁴⁴⁾。(4) スパイクしたボールが、ネットの上端と相手ブロッカーに当たって戻った時は、すべてアウトの判定。(5) ホールディングは前衛のトスに甘く、守備にはすこぶるきつい。フォームでとるため、かぶったプレーや音を立ててのレシーブも反則となったが、「タッチ式のツウ・キル」はフォローさえなければ認められた⁴⁵⁾。パスは掌を使っての日本式アンダーパス、チェストパスは全く認められなく、音を立てず指先を使うか合掌式が求められ片手パスも有効であった。サーブはオーバーハンドではネットも高くコートは狭いので打ち方が非常に難しくその上1本であり、フローターサーブが確実であるが、カーブするかドロップするか相手の間に打つサーブでなければ効果はなく、9人制でのスライドサーブが入れば有効である。スパイクでは、二段スパイク、アタックライン後方からの攻撃、移動攻撃は注目するものがある。トスではジャンプトス、バックトス、移動してのトスは6人制の特徴である。9人制バレーボールしか経験のない日本チームが行なう守備と攻撃は前衛、後衛の役割分担と移動を含む守備隊形の弱さにある。さらに常に移動しながらの攻撃が基本と

なる。最後に、6人制バレーボールははたから見て面白い、と大会を総括している。6人制では各選手が攻撃力、サーブ力、守備力と三要素を一人で全部完成しなければならぬ難しさがあるが、それが備わったチームの試合はラリーも続き面白い。攻撃選手が固定されないから、作戦が複雑で常にネット上でのプレーが多い。サーブ1本制とサイドアウト制15点もゲームを面白くしている⁴⁶⁾。

「極東9人制愛好で協会の権威者の代表格」⁴⁷⁾の協会理事をあえて選んで派遣役員としたというもくろみもあり、国際式6人制の実態把握と理解を大幅に見直すきっかけとなった。

7. 9人制6人制併用実施にむけて

JVA内では、極東式9人制を維持発展させる方針をたてながらも、国際式6人制バレーボールへの理解とともに、国内でも6人制の普及の必要に迫られていた。1957(昭和32)年9月にソフィアで開催された第53回国際オリンピック委員会(IOC)総会で、バレーボール男子が正式競技種目とされた⁴⁸⁾。オリンピックでは、6人制のみであり、翌1958年5月には、東京アジア競技大会でバレーボールは初めて正式競技化され、しかも9人制6人制併用開催が決まっていた。また同年1月には東京オリンピック準備委員会も設置された。協会では、これまで9人制6人制の具体的な併用実施策を示せず、一部6人制大会の開催と海外派遣のみであったが、6人制へのJVAの具体策が求められることになった。

1) 6人制の国内実施の方針

1958(昭和33)年2月の全国評議委員会には、会長から6人制国内方針と9人制6人制併用実施の計画が提案された。まず、今鷹競技委員長が審議の経過を報告している。「6人制の国内採用方針は実に困難な問題で、理事会においても、具体策は得られなかった。」と前置きをして「9人制を6人制にこの際切りかえる、ということは問題外として、6人制をどんな対策で行うにせよ、9人制はそのままするという観点から出した具体案」であり、さらに専門の対策委員会での検討を考えていた⁴⁹⁾。西川会長は、当面の課題としてアジア競技大会での9人制6人制併用の問題で「9人制は従来の方針を何等変更することなく進めると同時に、6人制も今いったような趣旨に従って国内的にとり上げ、権威ある全国大会に併用する方法」を打開策として方針を提案した。会長の説明には、「日本のバレーボールを世界のバレーボールにする」、「9人制バレーボールに対する信念と自負」、「国内を犠牲にして海外にチームを派遣してきたのも根本理念のため」等の協会の変わらない姿勢を維持したままで、疑問や批判が予想される苦しい案であったといえ

る。

2) 9人制6人制併用実施の具体案

競技委員長から出された具体案は、国体6人制採用、オフシーズン6人制大会の副案を示しながら、9人制6人制を分離させないことにこだわり、「現行全日本選手権大会に6人制を併用するもので、方法はトーナメントによる9人制の試合で負けたチームが、負けた順に平行して別個に6人制のトーナメント試合を行っていく形式のもので、9人制で全試合全勝したものは9人制の選手権保持者」となり、そのチームが6人制で6人制優勝チームに挑戦し、勝った方が6人制の選手権保持者となる、という方式であった⁵⁰⁾。1958年は、まず教員男子、総合男女(全日本選手権大会)の3種目に適用し、可能であれば高校、国体も導入していく。提案理由として、種々の困難さが予想されたが、9人制6人制の「主要な相違点」はローテーションとホールディングにしばられる。9人制にとって有意義となる点も多く、実施していく段階で修正をしていくのが望ましいと混乱を承知で「最善ではないがこれ以上の方法がない」と理解を求めている。

3) 9人制6人制併用案に対する質疑

この具体案に対して、まず9人制保持の理事から意見がだされた。「9人制は日本人にマッチしたゲームであり、ルール等も日本人の体格によくマッチして作られており」、現行の大会⁵¹⁾を6人制のために変更したり削除する必要をまったく感じないと具体案に反対している。一方6人制推進理事からは、オリンピック、世界選手権大会、アジア競技大会さらに世界青年友好大会等の国際大会への対応の不十分さを問題にし、①6人制大会の必要、②日程に余裕がない、③チームが消化できない、④地方協会の負担をあげ、JVAの具体案に賛成を示した。これらの意見を受けて、全国評議委員からの多くの質疑が出された。6人制への対応の見通しは、不十分かもしれぬが現在のままより、やらぬよりやった方がよいと、折衷案を取り入れていくことを了承している。JVAの対応は、あくまでも9人制主体で変更はなく、それに付随的に6人制を位置づけていることが何われ、あいまいさには不満も多くだされている。例えば、高校インターハイを6人制に移行する案に対しての疑義には、「インターハイの予選は9人制でやるだから、何等変わるころはないしかも予選に通過した上で、サービスといっは語弊があるが6人制をもしやる気になったらその門戸も開かれている」というのがこの原案の骨子としている⁵²⁾。そのため、相違点と指摘されたホールディングに関して高校には、9人制ホールディング基準で6人制を実施したらよいとか、現行9人制のホールディング基準と、国際式6人制のホールディング基準の中間基準を、数年間採用を希望する提案まで出された。アジア競技大

会を目前に控え、時間的に余裕のない中での提案に徐々に賛成意見も出され、とりあえず実施の方向で議論は進んでいった。競技委員長からは、今年度は3種目、来年度は全種目に適用の予定が出され⁵³⁾、審判委員長からはパス、ホールディング基準は「中間の基準」を当分採用していくことが示唆された。

長い議論の結果、1958（昭和33）年は、教員男子（全日本優勝大会）、総合男女（全日本選手権大会）の3種目に6人制を併用を決定し、国体および高校への6人制採用は次年以降の評議会の審議事項として保留とされた⁵⁴⁾。

4) 9人制6人制併用実施後の対応

国際大会を控え6人制バレーボールの国内の普及を目的に、敗者復活制に似た併用策が実施された。1958（昭和33）年5月には、20ヶ国の参加で第3回アジア競技大会が開催され、極東競技大会以来となるバレーボールも6人制、9人制が実施された⁵⁵⁾。その期間中に開催されたアジアバレーボール連盟総会では、今後もこの方式で開催していくことが議題とされたが、FIVB会長からは9人制開催には強い反対意見が表明された。

1959（昭和34）年2月の全国定時評議委員会議では、「根本方針」という表現はないが、世界選手権、オリンピックに向けて6人制強化をあげながら、9人制の国際大会開催を重視して、6・9人制大会別開催の要望も多いなかで、「併用大会是非の結論は出し得ないが、運営を合理化していくことより、更に併用の効果」が期待できると総括している。さらに「(国内については) 特になんら変えることなしに今の方策を強力に進めてゆくことによって、進歩が生まれる」と前年と同じ方針を確信している⁵⁶⁾。論議された国体、高校の6人制問題はなく、新たに男女実業団大会を併用に加えるに留まった。

さらに翌1960（昭和35）年2月の全国評議委員会議の冒頭で西川会長は「極東ルールによる9人制バレーボールの競技としての優秀性を自負し、これを国内において堅持するとともに国際バレーボール界の交流が究極においてこのルールの普及、発展及び国際的進出に資するものなることを認め国際ルールによる9人制バレーボールの導入消化を進める方針を再確認し、これが具体化の方途を一段と推進すると「基本方針」をあえて述べ、その目的達成のための世界選手権と東京オリンピックの6人制へ全力を傾けることであると⁵⁷⁾、支援を求める挨拶をしている。しかしJVAは今後の6人制対策に対しても、「そもそも9人制によって成り立っている団体であり、あらゆることを9人制によって考えるのが根本問題」⁵⁸⁾であるとする立場を表明せざるを得ない状況であった。6人制の対策を推進をしたいJVAと各地の9人制実施のみの状況には大きな地域差が生まれてい

た。その結果大会は、9人制、9・6人制併用、6人制の三形式で開催されることになった⁵⁹⁾。

5) 6・9人制併用から6人制へ

1960（昭和35）年10月には、世界選手権に初参加し、12月には世界覇者ソ連チームの招聘を実現させ、6人制バレーボールの認識を大きく変えざるを得なくなり、翌1961年2月の全国評議委員会ではその反省から、9人制ルールを大幅に改正することになった⁶⁰⁾。そして男子に続き女子の東京オリンピックへの正式競技化も決定した。同年秋には大学連盟が6人制に完全移行したのをはじめ、1963（昭和48）年には、オリンピックを次年にほとんどが6人制に移行した⁶¹⁾。しかし1963（昭和38）年の臨時全国評議委員会ではJVAは、次に東京オリンピックをひかえ6人制バレーボールに全競技を移行していく計画であり、これまでの方針を表明したにもかかわらず完全移行には賛成は得られず「候補選手の9人制選手権大会への参加を制限する」に留まった⁶²⁾。6・9人制併用という方針を6人制と9人制大会の完全分離開催として進めていくことになった。

8. おわりに

国際式6人制バレーボールの日本への1950年代の導入過程を次のようにまとめることができる。

1. 戦前の1936年のFIVB結成のためのベルリン会議に出席した理事は、東洋で育った極東式バレーボールの運営や競技性を高く評価し、国際式ルールにもなり得ることに自信を示していた。しかしそれは各国の状況の十分な情報把握の無いままの一方的な理解であったといえる。
2. 国内での普及のために独自にルール改正を進めたため、その普及の拡がりから日本式バレーボールに絶対的な自負と揺るぎのない自信を持つことになったが、世界とはかけ離れたバレーボールが定着していった。国際的に交流のないままの独善的といえるバレーボールであった。
3. 徐々に国際交流の必要性が求められ国際バレーボール連盟（FIVB）に加盟したが、JVAは国際式6人制とは距離をおき国内では大会さえ開催しなかった。国内で普及させてきた9人制バレーボール体制を崩してまでも6人制を実施することはただ混乱を招くのみとJVA内でも意見が分かれた。さらに全国評議委員の圧倒的な9人制支持に対しては、JVAとしては6人制の最新の情報もほとんど無いなかでむしろ9人制が犠牲や負担になることの誤解を生まないように常に9人制重視の根本方針を掲げざるを得なかった。
4. 国外へのチーム派遣や外国チームの招聘やアジア選手権大会や世界選手権大会への参加等により、国内で

の6人制への対応を明確することがせまられても、JVAの態度は、あくまでも9人制のための6人制導入案であり、苦肉の策が6・9人制併用という、敗者復活ともいえる同時開催案であった。国内では9人制実施者が6人制も経験してみることを意味し、JVAは「両者の根本プレーに差は無い」と6人制推進への理解を求めた。

5. 世界選手権大会の結果やソ連チームの来日は大きな影響を与え、ついに6人制に対応するために9人制ルール的大幅改正が行われた。そしてオリンピックの正式競技化と東京開催が決定し、大学、国体そして高校と6人制へ完全移行するなかで、JVAは主催全大会を6人制に移行する計画を立てたが、国内での9人制を優先的に堅持し、その国際的普及、発展のために6人制による国際交流という従来から表明してきた方針を修正せず、曖昧なまま6人制移行に進んだ。

註および引用

- 1) 森田信博：日本におけるバレーボールの普及と極東競技選手権大会について、秋田大学教育文化学部研究紀要、第69集、32～33頁
- 2) 一般男子のネットの高さは、2.30mから2.25mへ、コートは、22m x 11mから21m x 10.5mとなった。池田久造は、現状の日本人に適した改正と説明しながら、「有り体にいえば、体格のよい成年男子は統戦地に赴いて、国内に残った、いわゆる銃後を守る人々にとって、これまでのネットの高さは不適不利となってきた現状に対する打開策、というのが改正の主たる狙い」と述べ、さらに「ノッポのフィリピン人を標準として決められた2m30cmのネットの高さを、何をまちがって小柄の日本人が採用したと国際ゲームのなくなった今日では文句も言いたくなる」とまで言っている（池田久造：バレーボールルールの変遷とその背景、日本文化出版、1985、139,140頁）。
- 3) FIVAは、フランス語で、Fédération Internationale de Volleyballである。
- 4) 三宅勝重：国際排球委員会と競技ルール統一の問題、『排球』、1937、13号、110頁
- 5) アフリカを除く四大陸から、チェコスロバキア、ポーランド、エストニア、ラトビア、ルクセンブルク、ユーゴスラビア、オーストリア、ドイツ、ルーマニア、スペイン、ハンガリー、オランダ、アメリカ、トルコ、ブラジル、ウルグアイ、日本、中国、フィリピン、満州国の計21ヶ国代表が参集した（池田久造：前掲書、179頁）。
- 6) 三宅勝重：前掲誌、111頁
- 7) 三宅勝重：前掲誌、111-112頁
- 8) 参加14ヶ国の代表は次のようである。アメリカ、イタリア、ウルグアイ、エジプト、オランダ、チェコスロバキア、ハンガリー、フランス、ブラジル、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、ルーマニア、ユーゴスラビア。会議では、総会議事運営本部、出席者資格審査委員会、国際ルール制定委員会等が選出され、本会議が開催された（池田久造：前掲書、182頁）。
- 9) Hui-Ching Lu：Volley Ball Around The World, Intenational Volleyball review,1950, 11月12月合併号, p.15-16。池田（池田久造：前掲書、183頁）は、改正点として、6点あげている。
 1. メートル制の全面採用
 2. ネットの高さ以外ルールの男女共通
 3. ネットの高さ 男子：2.43m, 女子：2.24m
 4. ベルトより上の身体の中のどの部分もプレー可能
 5. ブロッキングは前衛3人が参加できる。グループ・ブロッキングは1回、ただし他のプレーヤーがボールに触れるまではブロッカーはボールに触れられない。

Hui-Ching Luは、第7、8、9回の極東競技選手権大会の中国チームのHC（ハーフセンター）であり、1945（昭和20）年からアメリカのウエールズ大学、コロンビア大学に留学し、世界のバレーボールに関しての学位論文をまとめている（池田久造：前掲書、181-182頁、G.Fisher：Foreword, Hui-Ching Lu：前掲誌、p.11）。

 6. 国際試合は、5セット・マッチ
- 10) 日本バレーボール協会編：バレーボール、1950、4号4月号、29頁
- 11) 日本バレーボール協会編：バレーボール、1950、4号4月号、29頁
- 12) 日本バレーボール協会編：バレーボール、1951、5号4月号、31頁
- 13) 日本バレーボール協会編：バレーボール、『編集後記』、1950、4巻2月号、32頁
- 14) 表は、Hui-Ching Lu：前掲誌、p.23-24および日本バレーボール協会編：昭和25年改正競技規則、『バレーボール』、1950、4号、2月号、27-32頁を参考に作成。極東ルールは、1934年のものであるが、第10回極東競技選手権大会の中止とともに改正は行われないうままである。
- 15) Hui-Ching Lu：前掲誌、Method of Play, p.18-20
- 16) Hui-Ching Lu：前掲誌、General Comments, p.20
- 17) 日本バレーボール協会50年史には、「日本は東ドイツ、フィリピンとともに過半数の賛成を得て、加入を認められた」（73頁）とあるが、池田によれば、戦争責任の追及という雰囲気の中で、「アルゼンチン、エ

クアドル、ルクセンブルグ、フィリピンの加盟は異議なく満場一致で承認されたが、日本の場合は別個の取り扱い扱いとなり、しかもイスラエルの提案によって表決にふされることとなった」(池田久造:前掲書, 214頁)とある。そして結果は賛成14, 棄権2(イスラエル, ガアテマラ)で承認された。さらに東ドイツの加盟にもイスラエル代表の反対声明があり、その声明に対するソ連の反対声明もあがる中で、会長提案による記名投票の結果反対2, 棄権2であったが承認されている。総会閉会式では、ポーランド代表から「FIVBの平和宣言」への同意が求められた。

18) 日本バレーボール協会編:バレーボール, 定評議委員会議事録抄, 1951, 5号4月号, 31頁。さらに「彼我の相違点等を研究, 日本ルールを世界のルールに持ち上げる一ステップとする考え方等」が国際連盟へ加盟の理由として承認を得ている。

19) 1951年3月のアジア競技大会は, インドの提唱でニューデリーで日本を含む8ヶ国で, 陸上競技, 水泳競技, サッカー, 自転車競技, バスケットボール, 重量挙げの6競技で開催され, 以後オリンピックの中間年に開催されることになった。

20) 日本バレーボール協会五十年史編集委員会編:前掲書, 217頁

21) 池田久造:前掲書, 232頁

22) 日本バレーボール協会編:バレーボール, 定期評議委員会議事録, 1953, 7号4月号, 33頁

23) 日本バレーボール協会五十年史編集委員会編:前掲書, 217頁

24) 池田久造:前掲書, 237頁

25) 大会については, ルールは日本式で行われ, 対戦した日本チームは地域選抜13, 単独3で, 全香港チームの10勝8敗の成績に終わった。全香港は疲労とルールの相違をあげていたが, 日本側の受けとめ方は, ①香港は19年前のバレーとそう変わらないこと, ②日本のパスの合理性の確認, ③ホールディング基準の再検討であった(日本バレーボール協会五十年史編集委員会編:前掲書, 217頁)。ただ「日本のルールは, ホールディングに対してのペナルティがゆるく, オーバーネットに対しては厳しすぎるとの香港側の要請があり」(同書, 78頁)ルールの併用がおこなわれたとしている。また, すく上げ式のアンダーパス, チェスト・トスやネットプレー, 巻き込み式のタッチは, 1961(昭和31)のルール改正まで9人制で許可されることになる(池田久造:前掲書, 238頁)。なお, 開催都市は, 大阪, 名古屋, 神戸, 横浜, 福岡, 広島, 東京, 仙台であった(日本バレーボール協会編:バレーボール, 常任理事会議録, 1953, 7号4月号, 34頁)。

26) 日本バレーボール協会五十年史編集委員会編:前掲書, 217頁

27) 早稲田大学の通算成績は, 6人制が24戦9勝14敗1分, 9人制が15戦14勝1分であった。なお, 全米学生選手権では, 3位になっている。

28) H. ウィルソン:早稲田大学の遠征は成功, バレーボール, 1953, 7号, 8月号, 11頁

29) 日本バレーボール協会五十年史編集委員会編:前掲書, 79-80頁, 219頁。香港での対戦結果は, 7戦6勝1分(池田久造:前掲書, 239頁)とするものと, 7勝1敗(昭和30年度全国評議委員会議事録の矢頭団長報告および日本バレーボール協会五十年史編集委員会編:前掲書, 80頁, 219頁)とするものがある。従来の極東ルールは, 2.30mのネットの高さで, 21 x 11mのコートの広さであり, 作戦タイムはない。なお, 1954(昭和29)2月の評議委員会議では, 「外資枠の関係にて国際試合は一種類以上不可能であるため, 1. 香港(台湾, 沖縄)交歓試合, 2. 南米於ける世界優勝大会, 3. 米国チーム招待が計画され, 実現している(日本バレーボール協会編:バレーボール, 評議委員会議事録抄, 1954, 8号4月号, 34頁)。

30) 日本バレーボール協会五十年史編集委員会編:前掲書, 79-80頁

31) 第2回アジア競技大会は, 1954(昭和29)年5月1日から9日まで, マニラで, 12ヶ国, 8競技(陸上競技, 水泳競技, サッカー, ボクシング, 射撃, バスケットボール, 重量挙げ, レスリング)で開催された。西川会長は, 参加18ヶ国の代表と会合を持ち, 関心を持つ代表者とアジアバレーボール連盟を結成し, 会長に就任したことを報告して(日本バレーボール協会編:バレーボール, 全国評議委員会議事録, 1955, 9号4月号, 38頁)。

32) さらにアジア大会参加種目は, 6ヶ国以上の実施している種目であって4ヶ国以上の参加が必要であることが規定されていた(日本バレーボール協会編:バレーボール, 理事会議事録, 1956, 10号, 2月号, 34頁)。

33) 池田久造:前掲書, 241頁

34) 極東式での国際大会は, 1934(昭和9)の第10回極東競技選手権以来であった。結果は次のようになった。極東式9人制, ①日本4勝, ②韓国1勝3敗, ③中国1勝3敗, 国際式6人制, ①インド2勝, ②日本2敗。3年後の1958(昭和33)年のアジア競技大会でのバレーボールの競技種目化が決まっていたため, アジア競技大会加盟のこの大会は以後開催されることはなかった。

35) 日本バレーボール協会編:バレーボール, 理事会議事録, 1956, 10号, 2月号, 34頁

- 36) 同年に開催されたアジア選手大会の状況や、「旧極東大会に関係あった地方、すなわち日本、フィリピン、中国、香港等のバレーボールルールは依然として普及度が高く競技ルールも、以前の極東ルールを採用しているようである。しかるにその他の諸地方では、主として戦後の米軍の普及によりようやく普及しつつある状態で、ルールも6人のローテーションによっている」（日本バレーボール協会五十年史、82頁）との認識をFIVB総会で説明し、6人制、9人制併用の承認を得たものであろう。日本協会はアジアの加盟国が増えることは期待したが、それはあくまでも極東式9人制の国際化実現のステップと考えていたことが、協会内の議論から伺われる。
- 37) 参加チームは次のようである。東京クラブ、日本電気、明治大学、専売東京A、専売東京B、松下電子、全仙台、松下電器、全早稲田、船橋クラブ、米軍羽田空港、日本体育大学、日本鋼管、都立大附属高クラブ（日本バレーボール協会編：バレーボール、日本バレーボール協会定時評議委員会議事録、1957、11号、4月号、49頁）。
- 38) 日本バレーボール協会編：バレーボール、定時評議委員会議事録、1957、11号、4月号、42-46頁
- 39) 日本バレーボール協会編：前掲誌43-44頁
- 40) 日本バレーボール協会編：前掲誌44頁
- 41) 極東式9人制の1957（昭和32）年の大会は、全国評議会では次のように決まった。都市対抗、実業団男女、大学男女、高校男女、教員、総合男女、国体、選抜優勝、学生東西対抗、一般東西対抗（日本バレーボール協会編：前掲誌45頁）。
- 42) これまで9人制論者の筆頭であったと述べられ、国際派の今鷹理事のアドバイスで団長として派遣された（池田久造：前掲書、251頁）。
- 43) 日本バレーボール協会編：バレーボール、実戦から得た6人制レー競技と技術、1957、11号、10月号、20-23頁
- 44) ネットの高さは、参加国によりまちまちであり、FIVB総会1955年ルールとも異なっていたが、本大会は、2.45mであった。またセット間と同じルールにベンチに戻って2分間休むのではなく、コート移動に2分あれば足りるとしてコート交代後はすぐに試合開始であった。さらにスタートメンバーは「出て」「入る」ことはよいが、さらにもう一度「出る」ことは許されない（N字型は不可）（日本バレーボール協会編：前掲誌、20頁）。
- 45) ホールディングは音でとるのは、ブロッキングの場合はグッドであるので矛盾しているから、むしろタイムで考えよと力説したが、「これはバレーボールの習慣である」との返答であった（日本バレーボール協会編：前掲誌、20頁）。
- 46) 日本バレーボール協会編：前掲誌、23頁
- 47) 今鷹競技委員長は前田豊（団長）、坂上光男（監督）、長崎重芳（コーチ）の各理事を派遣役員と選出した目的を明らかにしている。（日本バレーボール協会編：前掲誌、6人制国内対策決定、1958、12号、4月号、6頁）さらに帰国後の報告では「6人制のほうが、9人制より競技的に興味があるうえ、世界のすう勢は99.9%6人制に傾いている。いくら9人制を主張しても、世界連盟が採用することは絶対に不可能である。若い選手達の世界進出の夢を果たすべく、早急に6人制を採用せよ。」とまで述べている（日本バレーボール協会五十年史編集委員会編：前掲書、87頁）。
- 48) 尚、その後1959（昭和34）年ミュンヘンで開催された、第55回IOC総会で東京オリンピックが決定している。
- 49) 日本バレーボール協会編：前掲誌、6人制国内対策決定、1958、12号、4月号、6頁
- 50) 日本バレーボール協会編：前掲誌、7頁。同等といながら、負けたチームが6人制に向かうということに批判が多く、後に「負けた」と解釈せず「終わった」と解釈していくと修正している。
- 51) 高校男女、実業団男女、大学男女、教員男子、総合男女の年間のスケジュールをさしている。
- 52) どの種別を対象にするかも今後の課題であり、施設用具も9人制を利用していく。例えば、センターラインを9人制に設け、女子のボールは9人制規則を適用させる。また、インターハイの6人制では、出て戴いても戴かなくてもよい融通性を以て設けられると構想している。
- 53) 理事会では、今年度から国体全種目、学連の希望を確認して大学男女も6人制への移行が計画され、評議委員会の意向に沿っていくことが確認された。さらに、「国際連盟制定競技規則適用を6人制」、「日本協会制定競技規則適用を9人制」と名称を明確にした（日本バレーボール協会編：前掲誌、12頁）。
- 54) 協会としては、全種別の6人制実施の計画を進めるために、次年の評議会検討事項として継続審議とする予定であったが、高校とりわけ国体に対しては反対意見も多く、あらためて検討する案件となった（日本バレーボール協会編：前掲誌、13-14頁、52頁）。国体の6人制移行は、1962（昭和37）、高校インターハイは翌1963（昭和38）である。
- 55) 男子6人制には、日本、イラン、インド、男子9人制には、日本、インド、韓国、中華民国、香港、フィリピンが参加した。6人制は、FIVB公認のルールが

採用され、9人制はアジア選手権大会のルールに沿って開催されともに日本が悲願の初優勝をした。

56) 日本バレーボール協会編：前掲誌，定時評議委員会議録，1959，46-47頁

57) 日本バレーボール協会編：前掲誌，定時評議委員会議録，1960，54頁

58) 日本バレーボール協会編：前掲誌，定時評議委員会議録，1960，55頁

59) 6人制は，一般東西対抗男子，都市対抗男女，総合男女，6・9人制は，実業団男女，教員，9人制は，大学男女，高校男女，国体男女，学生東西対抗男女，総合男女，一般東西対抗の大会が開催された。

60) 6人制への対応のため，9人制ネットの高さとホールディング基準が改正された。一般男子：2.38m，一般女子：2.10m，高校男子：2.25m，高校女子：2.05m。

さらにホールディングとなるプレーとして，1. 左右の手のひらを上下にした「はさみ式」（いわゆるチェスト）のパス，トス。2. 指を伸ばして，手のひら側での下手パス。3. 身体の左右側面から単体側にクロスして押し出すパス。4. 頭上で，極端にかぶって前方に出すパス。5. タッチ攻撃。6. 手のひらを使っのフェイント。「9人制バレーをさらに発展させるゆえん」として9人制独特のプレーが全面的に禁止されることになった。（池田久造：前掲書，263-265頁）

61) 1962年には，都市対抗，国体全種目さらにNHK杯が6人制になり，1963年には，高校男女選手権が高体連に所属しインターハイ種目として6人制に移行した。9人制として残ったのは，実業団男女と総合男女の大会のみであった。

62) 池田久造：前掲書，267頁